

221

2022.6.30

学会ニュース

The Academic Society of Tokyo Woman's Christian University

▶ 2022年度 学会活動（予定）

2頁

▶ 2021年度 学会活動報告

3頁



東京女子大学

新しい世界への「再出発」

現代教養学部人文学科 歴史文化専攻 白井 恵一

新会員のみなさん、こんにちは。東京女子大学学会からご挨拶しあげます。「東京女子大学学会」は、東京女子大学の教員と学生を会員として、学生のみなさんが「自ら学ぶ」ことをお手伝いする組織です。みなさんは東京女子大学の新生であると同時に「学会」の新会員でもあるわけです。

さて、「自ら学ぶ」とはどういうことでしょうか。どんな役にたつのでしょうか。既にある情報を大量に迅速に収集すること、この問題にはこの方法と、既に定まったスキルを効率よく身につけること、こういったことはもちろん重要で役に立ちます。ですからこれから大学でもさらに磨きをかけてゆく必要があるわけですが、千差万別多種多様なスキルをできるだけたくさん身に付けるということばかりに躍起になっていると、「誰のために」「何のために」ということが忘れられがちです。スキルは「道具」ですが、道具を使うのは他の誰でもないあなた方、「この私」です。これが空っぽになると、人間は道具の束と同じになってしまいます。人間は道具になってはいけないのですが、空っぽである方がかえって道具をたくさん積み込めたりしますから、用心が肝心です。「私はどこに行きたいのか、何をしたいのか」を問い直すこと、言い換えれば自分が何も知らないということに気づくことこそ、大学で学ぶことの価値が、なによりその喜びがあります。このような学びは「よく生きること」にとっても役に立ちます。思いもよらなかった新しい世界の入り口が隠れているかもしれません。東京女子大学学会は、そのような皆さんの活動をサポートする場所ですから大いに活用してください。

発足は1950年5月で70年以上も前のこととなります。発足時の「趣旨」には「長老も青年も専門家も学生も、ひとしく謙虚に真理をもとめて再出発すべき」という目的が述べられています。当時は戦争の記憶がいまだ生々しい中、東京女子大学が新制大学として生まれ変わって2年後のことで、「再出発」という言葉が用いられているのは、そのような事情を踏まえてのことでしょう。ひるがえって現状を見れば、コロナ禍で社会の在り方も人々の生活も、大学もまた大きく変化しました。国際情勢も緊迫し未来は混沌としています。今は老いも若きも「ひとしく謙虚に」自分自身を省みて、いたずらに迅速な解答ばかりを求めるのではなく、問題の建て方自体を模索し、まだ見ぬ新しい世界に「再出発」する時です。

大学の公式サイトに学会のページがあるので、一度見てみてください。講演会や研修会、学術交流会や学術雑誌など、さまざまな活動の報告をみることができます。中でも学会では、学生のみなさんが自主的に行うグループ研究に

年2回「学生研究奨励費」を出しています。自分たちがやりたいテーマを決め、学年専攻の違いを越えて仲間が集まって活動を行い、その成果を「成果発表会」というかたちで、みなに知ってもらえることができます。もちろん必要な助言を教員から受けることもできますし、申請して採択された場合8万円までの「研究奨励費」を給付されます。半年ごとに申請の機会がありますから、ぜひ一度チャレンジしてみてください。

自らの関心を深く掘り下げるだけでなく、仲間と共有し、さらに多くの人たちに知ってもらおう。知的好奇心を大きく外に広げてゆく喜びを、この学会という場で見つけていただきたいと願っています。

2022年度 学会活動(予定)

◆始業講演／学生研究奨励賞グループによる発表

学内限定オリエンテーション特設サイトにて配信

「自己を知ること／他者を理解すること」

哲学専攻教授 榊原 哲也
(学会 哲学部会)

学生研究奨励賞受賞グループ発表

「大学生活を快適に過ごすためのアプリ開発」

黒瀧 かれん 他2名

◆学術交流会

今年度はありません。

◆公開連続講演会

日本文学部会にて開催予定です。

◆部会主催講演会・研修等

それぞれの部会の企画のもとに、随時開催されます。その都度、正門脇のガラス掲示板、学会掲示板、ホームページ、専攻オフィス掲示板等でお知らせいたします。自由にご出席ください。

◆学生研究奨励費

学生会員のグループが行う自主的な研究活動を対象に、研究経費を授与します。

A 一般研究奨励費

1 グループ当たりの奨励費は8万円(ケースによっては15万円まで)

B 刊行補助費

自主的に進めた共同研究の成果を刊行しようとするグループに対して、その費用を援助するものの2種類があります。

グループの募集は、前期(5月中)と後期(10月中の2回)。研究グループは、助言者を決め、約9カ月の研究の後、研究成果を報告会で発表します。研究成果報告は学会ニュースに掲載します。

発表会はWebにて今年度は行いません。

奨励費についての問い合わせは学会事務室へ。

◆刊行物

・学会ニュース

この号の他に年間3号刊行の予定です。学生ホール、図書館等学内に置きますので、ご自由にお持ちください。7月(卒業論文紹介)、11月(学生研究奨励費研究成果報告)に刊行の予定です。

今年度はコロナの影響で刊行月が変更されています。

◆学術雑誌

各部会関係の学術雑誌については、それぞれの専攻オフィスにお問い合わせください。おおむね年度末に刊行されています。

2021年度 学会活動報告

講演会等

〈学会主催のもの〉

◆始業講演

オリエンテーションサイト ビデオ配信
「みんなの情報科学」

情報理学専攻教授 加藤 由花
(学会 自然科学・情報処理部会)

◆学生研究奨励賞受賞グループ研究発表

オリエンテーションサイト ビデオ配信
「東女生が使いやすいアプリについて考える」

齋藤 里緒 他2名

◆公開連続講演会

日本文学部会企画
コロナ禍で中止となりました

〈部会主催のもの〉

◆哲学部会 主催 ●●●

(12.3)

「生を促進させるもの

— 演劇についての哲学的考察 —

三重大学 准教授 田中 綾乃

2021年12月3日に三重大学准教授・田中綾乃先生をお招きして、哲学部会講演会「生を促進させるもの—演劇についての哲学的考察—」をオンラインで開催した。田中先生は本学の学部・大学院出身で、学生時代の思い出や、本学の博士号第1号となったご自身の経緯に触れたあと、ドイツの哲学者イマヌエル・カントが『実用的見地における人間学』(1798)において「演劇」が「生の促進(Beförderung des Lebens)」をもたらすものであると述べている点に着目し、この「生の促進」の内実を、このテキストおよび『判断力批判』(1790)を手がかりに明らかにすることを試みられた。

カントによれば、快・不快の感情から美しいものに関する趣味判断が生じるが、快・不快の感情は「生の感情」に他ならない。「演劇」においては、この生の感情が促進される。なぜなら、演劇においては途中で何らかの難局が訪れ、「希望と喜び」の間に「不安と苦境」が訪れるので、「観客の心が相矛盾する情動の戯れによって大きく揺さぶられる」からである。その結果、「劇の結末に至って観客は生の促進を覚える」のである。

田中先生によれば、生の促進とは、私たちが日常の現在から一瞬抜け出て生を実感することに他ならない。そして、演劇における生の促進とは、同じ時空を共有する中で、構想力と悟性の自由な戯れによって魂が活気づくことだと先生は述べて、講演を締めくくられた。

本学教員、本学学生、卒業生、一般の方々等、90名近い参加者があり、講演後の質疑も活発になされ、きわめて充実した講演会であった。

(文責 榊原哲也)

◆日本文学部会 主催 ●●●

(1.17)

『「人の子」阿Q』

東京女子大学 名誉教授 下出 鉄男

2021年度は、秋以降感染状況が収まってきていたので、当初は、一部対面の、ハイフレックスでの講演会を企画したが、結局、完全な遠隔での開催になった。2020年より続くコロナ禍のしぶとさ、甚大な影響を思わずにはいられない。その一方で、遠隔の地の人が気軽に参加できる利点もできた。すなわち、本学の学生や教員のほか、上海外大の学生や院生の参加が可能になった。日中どちらにも縁が深かった魯迅について語り合うにふさわしい、意義深い講演会となったと思う。

講演では、『阿Q正伝』に限らない魯迅の数多くの文章をもとに、「国粹(自分の国固有のものへの絶賛)」「奴隷性(支配者が与える社会秩序に守られることに安心しきる)」など、近代化を阻む同胞(中国人)の意識に対し、容赦なく指弾していた魯迅の鋭い目を明らかにしながら、『阿Q正伝』を読み解いていった。当初の題「阿Qは今も活きている」のことは通り、「自由／平等／平和」の軽視を許す状況にいまなお直面する私たちにも、魯迅や魯迅の同時代人だけの人ごとではない、普遍的問題がそこにあった。国粹と奴隷性の一員だった阿Qは、最後に同じ国粹と奴隷性の同胞によって軽侮され惨殺されるのだが、その姿に人の子イエスの死を重ねるといふ示唆は、宗教とは何かの洞察とともに、大変刺激的で興味深い視座であった。最後のディスカッションでは、魯迅が日本に留学していたこともあって、〈近代化〉に直面する東アジアという、今日まで続く普遍的な問題を鋭く突く質疑がなされ、考えさせられた。

(文責 今井久代)

◆国際英語部会 主催 ●●●

(5.13)

「異文化コミュニケーションの鍵」

ジャパンインターカルチュラル・コンサルティング創業者
社長 ロッシェル・カップ

2021年5月13日木曜日1限の授業の中で、東京女子大学学会国際英語部会主催の講演会が開催された。講師はジャパンインターカルチュラル・コンサルティング創業者・社長であるロッシェル・カップ氏である。「異文化コミュニケーションの鍵」というテーマの講演で、アメリカの大学時代に趣味で絵を描いていて日本美術に興味をもち将来絵のビジネスを手がけることも視野に入れて日本語を学び始め、日本の金融機関勤務とアメリカでのMBA取得を経て、異文化間経営コンサルタントになった自己紹介からはじまった。

文化の違いによる問題が生じたときには全てを自分にあわせることを要求する従来型のアプローチではなく、より良いアプローチとしては双方の観点を認め、文化のギャップに対応する方法が紹介された。そこに至るまで、日本とほかの国の文化の違いを意識するうえで、コミュニケーションスタイルの直接さ、ことばへの依存度を測定する尺度をそれぞれ参加者が、設問に基づいてやってみるのが意義深かった。最後に外国人が感じる日本の文化の魅力的なところと難しいところについての、これも大変興味深いお話があった。

アメリカと日本、両方の文化をよく知っている異文化間経営コンサルタントならではの気づきを多く含んだ講演であり、両方の国の人たちがそれぞれに仕事をする上でよりよく相手をわかりあい、効果的に仕事をするのに何が必要なのか、深く考えさせられる内容であった。

(文責 鶴田知佳子)

(11.17)

「女性リーダーストーリー：
アフリカと日本を
ローカルの人々が作った作品でつなぐ」

株式会社 SKYAH CEO 原 ゆかり
NGO法人 My DREAM Org. 代表

ガーナのボナイリ村の復興を支援し、現地の人が自立するために装飾品、衣類、バッグ、ワイン、シアバター等現地の産物を使った化粧品等、フェアトレードではなく高品質、高デザインの製品として「Proudly from Africa」というブランドを日本で展開している原氏。ボナイリ村に対する学校、医療施設の設置、経済的自立等の支援活動の中で発揮したリーダーシップの形、グローバル規模のプロジェクト経験等についてご講演いただいた。原氏は、テレビでフィリピンの子供がごみ拾いで生計を立てている様子を見て海外で働くことを決意。東京外国語大学在学中に模擬国連のプロジェクトのリーダーを務め、そこで独りよがりのリーダーとしての失敗を経験する。

大学卒業後は外務省に入省しガーナに派遣されるが、現地の人に「何かをしてあげる」という驕りの気持ちに気づく。そこから現地の人と同じ目線で対話を続け、思い通りにならない状況の中、根気強く真摯に対応することで現地の人達との信頼を築き村人が自立することに成功する。その後、ビジネスを学ぶため大手商社の一員としてガーナに留まり、退職した後、ドバイの会社に入社するも架空の会社だったことに気づく。若干35歳であるが、失敗・挫折の経験をバネに、会社のCEOとしてイノベーションで高品質のアフリカの製品を日本に展開するほか、大学生にインターンとしてグローバル規模の社会貢献を経験させ、大学でもSDGsを教えることで、小さなことからできる社会貢献活動を若い世代に促進している。

講演時間の3分の2は生徒との質疑応答の時間とし、原氏とインターアクティブな対話のセッションが繰り返された。謙虚に失敗・挫折に向き合い学び続けている姿、「とりあえずやってみる」というチャレンジ精神、正解は一つではなくさまざまな答えがある、人の話に耳を傾け、周囲の状況を十分把握する等、学生にとって学びが多く勇気づけられるセッションになったようだ。

(文責 小林美恵子)

(11.25)

「シェイクスピアへの思い」

東京医科歯科大学 名誉教授 松岡 和子

2021年11月25日、国際英語専攻では本学学会主催のオンライン講演会に講師として本学英米文学科の卒業生で、東京医科歯科大学名誉教授である松岡和子先生をお迎えしました。講演のタイトルは「シェイクスピアへの思い」。松岡先生は5月にシェイクスピア劇全37作の翻訳を完了なさいました。個人役としては日本で3人目と言う偉業です。そしてこの功績に対して、先生は菊池寛賞、毎日出版文化賞、日本翻訳文化賞、朝日賞を受賞なさいました。

講演会は、当専攻の3年次生から寄せられた質問を松岡先生にあらかじめお伝えしておいて、お答えいただくという形を取りました。まず女子大時代のシェイクスピアとの出会いのお話から始まり、『ロミオとジュリエット』については、女性のせりふがどのようにこれまで翻訳されてきたかを辿りながら、シェイクスピアがジュリエットの言葉に託した思いを松岡先生ご自身はどう翻訳されたか、具体例を挙げてご説明くださいました。

また翻訳では意味を正しく伝えることだけでなく、原文のイメージをおろそかにしてはならないことなど、英語を学ぶ者にとって大切なアドバイスもいただきました。シェイクスピアを「分かったつもり破壊者」と呼ぶ松岡先生。それは分かったつもりでいても、読み直すたびに新たな発見があるからだそうです。これからもシェイクスピアの言葉を追究し続ける松岡先生のシェイクスピアへの思いに聴衆は圧倒され、感銘を受けた学びのひとつでした。

(文責 篠目清美)

◆経済学部会 主催 ●●●

(7.2)

「ガザに生きる女性たちの闘い

～自ら手ので、子どもを守る!」

元(特非)日本国際ボランティアセンター・パレスチナ事業 現地駐在員
2006年度本学文理学部社会科学科(経済学・国際関係論コース)卒業
山村 順子

昨今、日本のニュースでもパレスチナ・イスラエル間で起こったロケットとミサイルの応酬、そして東エルサレム・シェイクジャラ地区でのデモ参加者とイスラエル当局との間の衝突が報道されていたこともあり、124人の方にお申込みいただいた。封鎖・占領下で生きる現地の人々の生活の様子を、現地で撮影した写真や動画を交え、伝えた。その際、日本に住む人々と同じ人間に起こっているということを感じてもらえるよう、できるだけ戦争時ではなく、戦争前の日常的なガザの人々(文化的な側面も含む)の姿を伝えるよう心掛けた。また、ガザで起きていることと東エルサレムで起きていることは偶然別々に起こったものではなく、どちらも日々のイスラエルによる占領下であらゆる形の暴力、そしてその暴力によってもたらされる苦しみに耐えかねたパレスチナ人が、我慢の限界に達し、一丸となって取った一連の行動であることを説明した。実際、「ガザで起きていることは自分たちに起きていることと同じ」と東エルサレムに住むパレスチナ人も答えており、「チームパレスチナ」として変化を起こそうとしている人々の様子も伝えた。とかく宗教問題として片づけられがちなパレスチナ問題であるが、丁寧に紐解いていくと、決して宗教が原因ではない。ありがたいことに時間内に答えきれないほど多くの質問をいただき、双方向で話す時間も持つことができた。本イベントが新しい視点を持つきっかけになれば幸いです。

◆コミュニケーション部会 主催 ●●●

(11.1)

多文化コミュニケーションをらくごでデザイン

落語家 立川 志の春



世界にコメディアンと名の付く人は数多くあれども、大工から遊女に小僧、老若男女問わず、あらゆる役回りをたった一人で演じるのは落語家のみ。コミュニケー

ションの達人です。そこで今回、立川流の落語家真打、テレビ番組の「ガッテン」でお馴染み、立川志の輔師匠の三番弟子である立川志の春さんをお呼びし、コミュニケーションの極意を伺いました。

多くの落語家さんの中で、志の春さんをお呼びした最大の理由は、彼の経歴にあります。ある時、偶々覗いた志の輔師匠の高座に感動し、入門という経緯も劇的ですが、彼の持つ経歴が華々しくグローバル。米国の名門イェール大学卒、最初に就職した先は商社の三井物産。二つ目に昇進された頃からその経歴を活かし、英語での落語を披露し始めます。それは古典落語から創作落語まで多岐に渡り、シンガポールなど海外公演も多数出演しておられます。

学内限定公開で主にコミュニケーションや英語を専攻する学生に参加してもらいましたが、その講義は出囃子からスタート、まずは古典落語を一席。大半の学生にとっては初めての経験でした。小道具(扇子、手ぬぐい)の使い方、顔の向きで登場人物を使い分ける「上下」の法則など、独特のコミュニケーションの極意も教わり、後半には英語落語もご披露いただきました。日本語独特の言い回しを英語で表現することの難しさ、お客の反応の文化差など、日本の伝統芸能の奥深さをあらためて知ると同時に、コミュニケーションの多様性を体感する最高の機会となったように思います。

(文責 新谷大輔)

◆数学部会 主催 ●●●

(12.16)

フーリエ解析散策

東京女子大学 名誉教授 宮地 晶彦

フーリエ級数の原理は、どんな周期関数もサインとコサインの三角関数を重ね合わせて表すことができる、というものである。この原理は、フランスの数学者・物理学者フーリエ(1768-1830)が熱の伝導を扱った著書『熱の解析的理論』の中で提唱した。フーリエの与えた証明は数学的には完全なものでなかったが、後にディリクレやリーマンらによって厳密な証明が与えられた。さらに、フーリエ級数の研究に関連して、関数、積分、集合などの概念が厳密に考えられるようになり、それは現代的な解析学が生まれる土壌となった。

フーリエ級数は、複素変数の指数関数についてのオイラーの関係式を使うと扱いやすい形に書くことができる。フーリエ級数の興味深い性質の多くは、複素変数の関数の性質と密接に結びついている。複素変数関数と関連したフーリエ級数の研究は、リース兄弟、ハーディ、リトルウッド、ペーリーらによって1930年頃さかんに研究され、その後のフーリエ解析の発展の基礎となった。

講演では、フーリエ級数と複素関数とに関する理論をできるだけ数式を用いずに紹介し、さらに、フーリエ解析に関わる自身の研究や東京女子大学での数学教育の経験などを交えて数学の研究や教育についても話をした。

◆自然科学・情報処理部会 主催 ●●●

(10. 11)

情報科学における NoCode の位置付け

長岡技術科学大学大学院 工学研究科 准教授 白川 智弘

NoCode Japan 株式会社イベント運営部 山口 鳳汰
兼 教育事業部 Click 認定講師

白川智弘氏（長岡技術科学大学大学院工学研究科准教授）および山口鳳汰氏（NoCode Japan 株式会社イベント運営部兼教育事業部 Click 認定講師）をお招きし、NoCode と呼ばれる、プログラムのコードを書くことなしにアプリやサービスを開発することを可能にする技術に関してご講演いただいた。講演会は、Zoom によるオンライン形式で行われた。

NoCode による開発では、GUI を主な手段として用いることにより、パワーポイント資料を作成するのに近い感覚でアプリやサービスを構築することができる。開発に用いられるプログラミング言語の学習と修得を必要とする、ソースコードを記述することによる従来のソフトウェア開発に比べて、非常に簡単かつ省労力での開発が可能となる。したがって、アプリやサービスのアイデアさえあれば、短期間の学習により開発の現場へと進むことができるようになるという長所がある。一方、NoCode の短所としては、開発できるアプリやサービスに限界があること、また、プラットフォームへの依存性が大きいことが挙げられた。NoCode 技術をめぐる、国内外の動向についても簡単に紹介された。講演会の後半では、NoCode Japan が運営する NoCode アプリ開発のプラットフォームである Click を利用した NoCode による開発のワークショップが行われた。ワークショップには希望者のみが参加する形式であった。出席者の多くは参加し、簡単な「お買い物アプリ」の作成を通じて、NoCode 開発の実際を体験した。

(文責 春名太一)

◆外国語部会 主催 ●●●

(11. 26)

「移す、ほぐす、広げる

— 文芸実践としての翻訳」

東京都立大学人文社会学部 准教授 金 志成

翻訳とは、いわば言葉の全身運動である。ある言語で書かれた文章を別の言語に移すには、ときに言葉の関節をほぐし、可動域を広げてやる必要がある。翻訳という作業の、そのような固有の性質は、特に文学作品の翻訳において際立つ。

日本の近代文学は「翻訳」によって形成された。二葉亭四迷による訳業は画期的意味を持つが、彼は「原文の音調」や句読点をも訳文に移すことを意図していた。井上健の指摘するとおり、「外国語の構造」を「可能な範囲で忠実に取り入れる」作業が、それまでにない日本語を

生み出したのである。

翻訳作業には本質的ジレンマがある。「逐語訳」と「意識」の間での葛藤である。それは「読者を作者に近づける」か「作者を読者に近づける」か、あえて外国語の文体の違和感を残す「異質化」か日本語としての自然さを優先する「同質化」か、という両極を巡る問題とも言えるだろう。

原文の「異質性」を味わえる現代ドイツ文学の翻訳としては、トーマス・ベルンハルト『消去』や W.G. ゼーバルト『アウステルリッツ』が挙げられる。講演者自身によるトーマス・メレ『背後の世界』の翻訳の際にも、慣用表現の扱いに苦労した。たとえば、逐語訳では「空まで臭う」、意味としては「言語道断である」という表現と、逐語訳では「あらゆる雲から落ちる」、意味としては「とても驚く」という表現が組み合わされている箇所は、「驚天動地」という日本語にヒントを得て「空」や「雲」などのイメージを残しつつ、「文字どおり」を補うことによって原文が慣用句であることを強調し、「文字どおり天を驚かし地を動かす」と訳した。

(文責 柗淵博樹)

(12. 14)

「通訳ブースから見る世界」

国際英語学科国際英語専攻 教授 鶴田 知佳子

2021年12月14日の講演会は、本学教授であり専門分野の研究者として優れた業績を有するだけでなく、NHK や CNN 他国際的な舞台で長いキャリアをもつ同時通訳者という豊富な実践経験をもつ鶴田知佳子氏を講師に迎えて行われた。鶴田氏は通訳者養成、通訳教育にも携わられているので、「通訳ブース」の内と外それぞれの「現場」に関して、興味深いエピソードいっぱいの臨場感に溢れたお話をうかがうことができた。お話の内容もさることながら、氏の話しぶりがまた軽やかなリズムに乗り、この話題からあの話題へと途切れることなく滑らかに紡がれてゆくさまは聴取者を魅了してやまない。なるほど「通訳」のプロは「語り」のプロであり、またそうでなければならぬのだと納得させられた。それは単なる「テクニク」の問題ではない。他者とのコミュニケーションの可能性を信じて他者に対して開かれた柔軟な精神がそこにあることを感じ取るがゆえに、ひとは「この人の話を聞きたい」、「この人に話をしたい」と思うのだ。コロナ禍のさなか世界同時配信のアニメイベントで、同時通訳者音声を AI で英語字幕に起こす試みなど、通訳業の現状と将来の展望に関する豊富な実例を交えたお話は、本学1年生を中心とした若い聴衆に魅力的なロールモデルのひとつを提示できたと確信している。

(文責 白井恵一)

◆健康・運動科学部会 主催 ●●●

(10.20)

「太極拳」を通して、 新たな自己の身体の発見、そして、 「ジェンダーの多様性」を考える

立教大学コミュニティ福祉学部
スポーツウエルネス学科 教授 佐野 信子

太極拳は老若男女の健康法として広く普及しており、学生の関心も高い。西洋のスポーツやトレーニングとは異なる特徴を持つ身体技法であり、太極拳を通して自己の身体について新たな気づきを経験し、ジェンダーの視点からこの気づきを振り返り、考えを広げていく機会を持てればと思い、本講演会を企画した。

講師は、大学の授業において長く太極拳を教授してこられた、立教大学の佐野信子教授にお願いした。

講演会では、まずいくつかの太極拳の動きを体験した。高等学校までの学校体育では、近代西洋に端を発するスポーツが主たる教材として用いられ、「より速く、より高く、より強く」というベクトルが追求され、筋肉量に勝る身体、乱暴に言えば「男性の身体」が有利である種目を経験することが多い。しかし佐野先生が指導される太極拳では、「より速く」に対して「よりゆっくりと」、「より高く」に対して「より重心を下げて」、「より強く」に対して「より力を抜いて」といったベクトルを体験し、こうしたベクトルの本当の強さやしなやかさを実感することとなった。講演会後半には、太極拳をはじめとする東洋の身体技法の魅力や大学で経験する必要性、東京オリンピックをはじめとする現代のスポーツ界にみられるジェンダー問題などを、具体的事例を交えてご講演いただいた。最後に、自身も女子大出身である佐野先生および帯同して参加くださったファシリテーターの立教大学3年福島絢音さんから、本学学生にあたたかい励ましのエールを頂いた。

終了後のアンケートでは、太極拳を体験したことによる身体的な気づきが得られただけでなく、高等学校までの学校体育にみられたジェンダー・バイアスに気づき、ジェンダーの多様性を考える契機となったことが窺えた。

今回コロナ禍の中での開催となったが、参加者全員マスク、消毒、ゴム手袋着用、会場のドアを全て開放し、最大限換気を促すなど、細心の注意を払い、対面で実施した。対面だからこそ得られた学びも多かったように感じられた講演会であった。対面実施をお認めくださり、コロナ対応のご協力を頂いた学会および関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

(文責 平工志穂)

(10.20)

1日1回、私の身体の細胞とのコミュニケーション： 仰臥位で行うボディフルネス ～身体チューニング法～の発見

東京農工大学 客員教授 跡見 順子
東京大学 名誉教授

どうすれば、しなやかで凛とした美しい姿勢を手に入れることができるのでしょうか？ 東京農工大学・客員教授（東京大学・名誉教授）跡見順子先生に「身体」と「細胞」の2つのレベルからご講演いただきました。武術や日本の身体文化そして細胞も「丹田」（人では立位の重心、細胞では中心体）制御が核心です。30年前に同定した抗重力筋の不活動で減少する分子シャペロン・αB-クリスタリンは、細胞の丹田を制御する微小管線維を動的に維持し、身体の直立軸の維持に貢献しています。また、加齢で増加する精神疾患「コンフォメーション病」の予防にも貢献しています。私たちの体の動きは、細胞にとって機械的ストレスです。バランスを崩した姿勢や運動は、細胞にとって悪いストレスとなり、膝や腰の痛みにつながります。“適切で正しい運動”は良いストレスとなり、ミクロとマクロの自律系を調整します。ご講演では、身体の歪みを正常化する触覚に導かれた仰臥位での「体幹・下肢筋群」ボディフルネスのチューニングエクササイズを紹介いただきました。老若男女問わず障害のある方でも安心して行うことができ、自ら体と心を統合して良い姿勢と良い脳が生まれ尊厳ある人間の命が生きられます。受講した学生からは、「跡見先生が年齢を感じさせないほどにパワフルでハキハキとしていて、チューニングの効果を強く感じた」「心身と科学の関係をわかりやすく理解することができ、科学から物事を考えることは視野を広げることにも役立ちそうだと感じた」「細胞をはじめとする体のづくりを、科学的視点や日本文化の視点から考えることができ、健康や身体に関してのみならず、人生や生命についても深く考えるきっかけとなった」等の感想が寄せられ、研究者として長年にわたり第一線で活躍され、人生の大先輩である跡見先生のご講演から多くの学びを得たように思います。

(文責 藤田恵理)

(11.4)

薬物依存症の予防教育

ASK (全国アルコール薬物問題全国市民協会) 依存症
予防教育アドバイザー

塚本 堅一
風間 暁

今回この講演会を企画したのは、コロナ禍で10代の薬物使用・過剰摂取者が増加しているというニュースがあり危機感を抱いたことがきっかけです。そこで専門家の方に薬物依存症の予防教育をお願いしたいと考えました。お話しいただいたのは特定非営利法人 ASK の依存

症教育アドバイザーの塚本堅一さんと風間暁さんです。

はじめに、薬物だけでなく、カフェインやアルコール、ギャンブルなど依存症になりうる物質や行為について、スライドを使って基本的な知識を学びました。その後、薬物依存症の当事者の体験を聞き、特別な人が依存症になるのではなく、誰にでも起こりうることであり、学生たちは講演会を視聴することにより自分のこととして考えることができたように思います。たくさんの感想が寄せられましたがいくつかを紹介します。

「実際に薬物依存に陥ってしまった当事者の方は私たちの気分が重くならないように配慮くださった話し方をされていましたが、言葉一つひとつに重みがあったように思います。薬物だけでなくアルコールやギャンブル、カフェインといったさまざまな依存症は、私たちが気づかないだけでとても身近に存在しているのだと感じると同時に、だから人々は知らないうちに依存症になってしまっているのだと怖くも感じました。」「薬物から得られる快感はインスタントな快感で、やる気などが出てもそれは元気の前借りであり、必ず使用後には疲労感などの反動がやってくるという説明がとても印象に残っています。」「ご自身の辛い体験まで赤裸々にお話くださって、『いつでもやめられると思っていた』との言葉は、一時の快感を得るために薬物を使い始めたならもう後戻りはできないのだという恐ろしさを教えてくれました。」「人間の数だけ依存症の原因が存在し、『私は絶対にならない』と思っている人でも、誰にでも起こりうる病気だと思います。」

依存症になる人はどんな人か、本当に自分に関係ないのか等、現代の依存症問題について正面から考えさせられた時間となりました。

(文責 曾我芳枝)

学生研究奨励費

【後期募集分】

地域日本語活動を通じて学ぶ多文化共生
五嶋 友香 他3名

【前期募集分】

本学図書館所蔵『源氏百人一首』の翻刻と字母研究
飯田 希栄 他3名

女性の生活に健康的な一選択肢を提案する
～ヴィーガン菓子を通して～
磯貝 美和 他3名

大学生生活を快適に過ごすためのアプリ開発
黒瀧かれん 他2名

学生研究奨励費成果発表会 (9.21/1.19 1.21)

刊行物

◆東京女子大学学会ニュース

第218号 (9.20) 2019年度学会活動報告
第219号 (10.30) 卒業論文紹介
第220号 (1.11) 学生研究奨励費成果報告

【学会から補助を受けている刊行物】

◆日本文学 第118号 (東京女子大学学会日本文学部会)

- 『平家物語』義仲関連記事の考察 原田 敦史
竹河巻から見た秋好中宮 平林 優子
「なまめかし」から光源氏の栄華を見る
—「なまめかし」の偏在と「ねびまさる」の関係— 塚本 典子
近世期における『徒然草』受容
—洒落本『新つれつれ草』を素材として— 中田 紗良
宮沢賢治童話における〈クマ〉
—他者として描くこと— 神田 彩絵
稲垣足穂の月・星・夜
—「一千一秒物語」を中心に— 川端 あや
山本昌代「鷲」論
—闇に誘う〈黒い鳥〉— 大西 里菜
「殺人出産」論
—「正しい」世界からの脱却— 秋山 志織
陶淵明「桃花源記」研究
—外人を通して浮かびあがる陶淵明の思想— 森 そよ花
李白「臨路歌」について 清水 もも
(翻刻) 国文学研究資料館田藩文庫蔵『勅撰之法』・
西尾市岩瀬文庫蔵『和歌秘伝書』
—日本語表記史研究の一素材として— 宮本 淳子

あいづち使用の分析
—「ボクらの時代」を題材として— 山下まどか

第四十一回 松村緑賞

二〇二一年三月卒業論文題目

二〇二一年三月修士論文題目

東京女子大学日本文学研究会規約

◆英米文学評論 2020年度卒業論文集編

(東京女子大学英米文学研究会)

- A Study of "Childness" in Jonathan Swift's *Gulliver's Travels* Haruna Tsukada
A Study of Thomas Harris: Gender and Sexuality in *The Silence of the Lambs* Yu Tomizawa
A Linguistic Analysis of Singular "They":
How Non-Native Speakers of English Receive
Singular "They" Yui Nagasaki

The Cultural Representation of
Japanese Identity: The Relationship between
Marie Kondo and Orientalism
..... Haruka Ogasawara

2020 年度天達賞受賞者および
卒業論文・Final Presentation タイトルリスト

◆史論 第75集 (東京女子大学読史会)

クラウディア・クインタの変容 (一)
..... 樋脇 博敏

敦煌の功臣たち — 帰義軍時代の敦煌石窟と功臣号
..... 赤木 崇敏

〈研究ノート〉

創られたオリバーレスのイメージ
— イメージ先行からの脱却と史料再検討の必要性
..... 竹内 遥風

第二次世界大戦末期のドイツ社会
— 戦時下の共同体の分析に向けて
..... 小林 百音

ナチ体制下のジードルング
..... 櫻田 美月

◆東京女子大学国際関係研究 第10号
(東京女子大学国際関係専攻)

◆東京女子大学社会学年報 第10号
(東京女子大学社会学専攻)

■研究ノート■

労働概念の歴史 (3) 酒巻 秀明
〈論文〉

韓国における介護の質に関する定期評価及び
昼・夜間保護サービス提供の研究
— 介護サービス供給の法的基盤との関連で
..... 西下 彰俊

□社会学専攻 2021 年度卒業論文題目一覧

◆東京女子大学経済研究 第10号 卒業論文要約号
(東京女子大学経済学部専攻)

日本のビール業界の展開
— 大手ビール市場におけるサッポロビールへの提案—
..... 小野寺裕香

日本の観光旅行における目的地決定要因の実証分析
..... 児玉佳奈子

水族館サービスの利用における実証分析
— 入館者数の決定要因とその周辺— 田村 香音

COVID-19 と日本経済に関する一考察
— テレワークの課題と可能性— 中原未紀子

東京女子大学学生の交通手段選択に関する実証分析
..... 野村 美緒

日本の中小企業の海外展開 畑中 瞳佳
地域間交通流動の要因に関する実証分析
— 重力モデルを用いた来訪者数の分析—
..... 服部みなみ

M&Aによる中小企業の事業承継について
— 課題の解決と普及のために— 矢形美幹子

観光と地域の開発
— 過疎地域における持続可能な観光開発の意義—
..... 山下 英

AIの普及による経済格差の拡大 若井 瑞希

地方都市におけるコンパクトシティの推進
— 日欧比較を通じての課題と展開— 渡邊 千夏

2021 年度卒業論文題目一覧

東京女子大学経済学専攻彙報

◆2021 年度 東京女子大学現代教養学部国際社会学科
コミュニティ構想専攻 津田ゼミ・伊奈ゼミ 卒業論文集

2021 年度 東京女子大学現代教養学部国際社会学科
コミュニティ構想専攻 桑子ゼミ・クリスティーンゼミ
卒業論文集

2021 年度 東京女子大学現代教養学部国際社会学科
コミュニティ構想専攻 矢ヶ崎ゼミ 卒業論文集
(東京女子大学コミュニティ構想専攻)

◆東京女子大学心理学専攻卒業論文要約集 2021 年度 (2022.3)
(東京女子大学心理学専攻)

◆Culture and Communication 第34号
(東京女子大学コミュニケーション専攻)

◆言語文化研究 第30号 (東京女子大学言語文化研究会)
〈論文〉

アニメーションの作品名における短縮語形成
..... 五十嵐芹菜

テキストチャットにおける(笑)の社会語用論的機能
..... 片山 萌

英語の語彙習得に学習方法が与える影響
..... 塚原 万智

色彩語「あか」の研究
— 赤・紅・茜・丹・朱・緋と red, scarlet,
vermilion, crimson— 中津川ゆき

日英中3言語の「甘い」の比較
..... 中村 瑠夏

お笑コンビ「ぺこば」による
「ノリつつこまない」漫才のメカニズム
..... 水野 佑香

CLIL を取り入れた英語の授業 吉田 早希

〈翻訳〉

ディック・キング＝スミス『プリティイー・ポリー』
……………今井 葉月

〈言語科学専攻科目 成果報告〉

「フィールド言語学演習」ケチュア語紹介プロジェクト
……伊豆田理奈・惣谷紗貴・佐々木充文

2020年度現代教養学部人間科学科言語科学専攻
卒業論文題目

◆東京女子大学 教職・学芸員課程研究 第3号
(教育学・博物館学協会)